

「半島地域づくり会議 in 下北」開催概要

国土交通省都市・地域整備局
地方振興課半島振興室

住民主体の地域づくりを促進しつつ半島地域に共通する諸課題を解決していくため、半島地域のこれからの地域づくりをともに考え、知見を交換・共有する場として、地域主体の手作りによる考え・学ぶ会議を目指し「半島地域づくり会議 in 下北」を、平成 22 年 2 月 27 日（土）～28 日（日）の 2 日間、青森県下北地域を舞台に開催した。

今年度のテーマは『ヒト・コト・モノをつなげるー地域の未来・希望につなげる』。地域づくりを支える「絆」の育て方、地域のヒト・コト・モノのつなげ方や活かし方について、参加者全員で考え、議論するために、以下のプログラムを実施した。

※これまでの実施地域は、平成 18 年度、能登地域（石川県）、平成 19 年度、宇土天草地域（熊本県）、平成 20 年度、幡多地域（高知県）

ー2 月 27 日（土）プログラムー

【ワークショップ 1 日目

ー地域資源の活かし方を考えるー】

事前に申込みがあった全国の半島地域及び地元青森県内の約 70 人（地域づくり団体、行政関係者等）が 2 つのコースに分かれて、地元の「ぷらっと下北」（後述）が企画したモデルツアーに参加した。

ツアー終了後は、各コース 3 グループ、合計 6 グループに分かれて、ツアーのふりかえりを行い、プログラムで体験したことをもとに地域資源の活かし方を考えるワークショップを行った。

●自然資源コース（むつ市、東通村）：

本州最北端の下北には、海・山・里の多様性に富んだ地域資源があり、これを効果的に活用する

ため歴史・文化資源を組み合わせたプログラムを企画。青森県天然記念物・寒立馬とのふれあいや国重要無形民俗文化財「能舞」の観賞、斗南ヶ丘での酪農見学・食体験を行った。



（下北の食体験）

●冬の下北体験コース（むつ市大畑地区、風間浦村）：

冬の下北ならではの「さむ〜い！あったか〜い！」をテーマに、今までとはひと味違う切り口で、これまであまり観光資源として捉えられていなかったものを活用したプログラムを企画。昭和のたたずまいを残すレトロな商店での買物や極寒の津軽海峡での布海苔採り体験、下北の味覚である塩辛の試作や海藻を用いた絵葉書の作成などを行った。



（レトロな商店での買物）

●資源活用ワークショップ：

グループごとに、各コースのプログラムで体験したことをもとに、地域資源を活用した目玉プロ

グラムの提案、それをアピールするためのツアー名称やキャッチコピー、価格設定などを検討し、ツアー宣伝用ポスターを試作した。



(グループごとのポスター試作)

ー2月28日(日) プログラムー

【ワークショップ2日目

ー地域の元気をつくる“つながり”を考えるー】

午前中は、1日目に作成したポスターを用いたワークショップの結果発表、「ぷらっと下北」の紹介、地域プラットフォーム形成に関する他の半島地域からの事例報告を実施。午後には今回のメインテーマに沿って会場を交えたディスカッションを行った。

出席者は約100人(延べ人数)。

●「ぷらっと下北」メンバーによるリレートーク

下北地域では、地域活性化のためのプラットフォーム(支え合い、役に立ち合う共通基盤)をつくるため、NPO、住民、行政、経済団体などが垣根を超えて協働し、「ぷらっと下北」を立ち上げた。

そこで、「ぷらっと下北」のメンバーがそれぞれ自分の言葉で、下北地域への思いや結成までの経緯、これまでの議論の成果を述べ、「ぷらっと下北」結成のアピールを行った。



(「ぷらっと下北」メンバーのリレートーク)

●他の半島地域からの事例報告

◎「売り手」と「買い手」が対面してもののやり取りをする「場」を創出して、コミュニティの活性化に取り組む

「市でつなぐ・・・海辺の日曜日」〔幡多地域 高知県黒潮町 NPO法人高知県西部NPO支援ネットワーク〕

◎奥能登の新たな地域ブランド創出による地域振興に取り組む

「食でつなぐ・・・能登井」〔能登地域 石川県奥能登ウェルカムプロジェクト推進協議会〕

◎里山の風景を守り、人と土のあたたかさを体感してもらうため、体験観光に取り組む

「ツーリズムでつなぐ・・・里山」〔紀伊地域 三重県紀北町 下河内の里山を守る会〕



(事例発表)

●全体ワークショップ

◎メインテーマ

「ヒト・コト・モノをつなげるー地域の未来・希望につなげる」

《アドバイザー》

澁澤 寿一氏 NPO法人樹木・環境ネットワーク協会理事長

鈴木 輝隆氏 江戸川大学社会学部教授

関根 千佳氏 株式会社ユーディット（情報のユニバーサルデザイン研究所）代表取締役

- ・ビデオカメラとプロジェクターを使って、来場者全員に対する一斉アンケートを実施。
- ・司会者による来場者へのインタビューを実施。

会議参加者全員が、地域づくりを支える「絆」の育て方、地域のヒト・コト・モノのつなげ方や活かし方について考えた。



（会場を交えたディスカッション）

◎主な意見等

〔質問〕 地域を元気にするには様々なひとが関わることが重要か。どんな関わりが大切だと思うか。

- ・自分たちの活動を遠目で見ている人にも、活動を応援してもらえるような関係が築けたらいいと思う。

- ・きっかけづくりには行政の役割が大きい。そして、地域が取組を続けていくためには、一人一人の思いをつなげる人や、つなげる人を支える人など、いろいろな役割の人が必要。それらが重なり合って存在することで、一つの何かが得られる。一人一人が「何ができるのか」ということを自覚する必要がある。
- ・地域のイベントを利用して、自分たちの活動のPRを行うことが重要。場を利用しないのはもったいない。また、そのような場をつくるのが地域活性化につながる。
- ・住民として、よその人にある程度のことは説明できるよう、地域をなるべく歩き、地域のことを勉強することが重要。

〔質問〕 地域の元気づくりには、行政が積極的に関わるのが重要か。

- ・きっかけづくりや活動している人をつなぐ役割は行政が担うべきだが、行政だけで活動をひっぱり続けていくことには限界があるため、住民が自発的に進めていけるよう引き継ぐのも行政の役割であると思う。
- ・地元の人たちにすぐに活動を任せてしまうのは、資金面でも難しい。多くの活動は軌道にのるまでの助走期間が長いので、行政は10年20年と責任を持ってサポートし、時間をかけて地元主導に移していくべき。
- ・あくまでも民間が活動の主体となり、行政はアドバイザー、スポンサー的な立場でフォローすることが重要だと思う。行政の人間が主体として参加するのはよいが、その場合は行政の人間としてではなく、一個人として参加するのがよい。
- ・行政が参加していると発言を遠慮してしまうところがあるので、行政が入らないほうが、議論が活発になり活動が飛躍する。しかし、行政による「きっかけ」がなければ活動は始まらない。
- ・行政は、特定の人、特定の地域に対してだけの

支援ができないため、委縮してしまい、思いきって参画できない。そのため、行政の人間が活動の参加する場合は、個人として関わる部分と行政として関わる部分の意識分け、バランス感覚を持つ必要がある。

〔質問〕「ぷらっと下北」のような活動は地域にとって重要か。

- ・人に頼っては駄目で、取組を開始する都度賛同する人を呼び込んでいくしかない。
- ・よその地域にも負けないような魅力的な活動ができるということを発信するためには、「ぷらっと下北」のような地域内で連携した活動が必要。
- ・関心のない人が多い地域では、何らかの組織を作っていく必要がある。民間のいろいろな職種の間人間がつながった上で行政を巻き込んでいくのが重要。
- ・専門的な分野の人が連携しあえばそれまでと違った力が生まれる。できる範囲のことで協力し合い、役割分担をしっかりと持つことが重要。
- ・「ぷらっと下北」のような活動は、重要だが、参加者の平均化を目指してはいけないと思う。

以上

